

# 『医心方』の伝来から見た日本医学史の一側面

杉 立 義 一

はじめに

古典の書誌学的、文献学的基礎を究明することが、それを理解する第一歩であり、医学史研究の基礎作業であるという見地に立って、私は昭和五十六年以来、十回にわたり、「『医心方』の伝写について」と題して報告してきた。今回、会長講演として、それらを総括した要点を報告する。与えられた紙数・時間の関係上、研究過程は省略する。

## 一 医心方写本

(一) 現存する写本 五十二点 これを次の八群に分かつ。

### A群 半井家本の系統

- 1 文化庁保管 半井家本 平安末期 三十卷 三十軸一冊
- 2 宮内庁書陵部蔵 書陵部本 安政元年 三十卷 三十軸
- 3 お茶の水図書館蔵 成實堂本 平安末期 卷第二十二 一軸
- 4 広島大学文学部蔵 安政元年 卷第七 一軸

B群 仁和寺本の系統

- 5 仁和寺藏 仁和寺本 平安末期 五卷(卷第一・五・七・九・十)五冊 卷第十九殘闕一葉
- 6 尊経閣文庫藏 平安末期 仁和寺本卷第二十七(前半部)一冊
- 7 国立公文書内閣文庫藏 紅葉山文庫本 多紀元惠写 寛政三年 二十卷二十冊
- 8 東京国立博物館藏 多紀家本 多紀元惠写 寛政三年 二十卷二十冊
- 9 蓬左文庫藏 江戸中期 二十卷二十冊
- 10 大東急記念文庫藏 文政三年 伊沢信恬写 二十卷二十冊
- 11 杏雨書屋藏 文政十三年 森川免毛写 十九卷二十冊
- 12 桂仙堂文庫藏 文政十三年 森川免毛写 十九卷二十冊
- 13 静嘉堂文庫藏 天保年間 二十卷十七冊
- 14 東京国立博物館藏 坂家本 天保五・六・七年 坂璋写 二十卷二十冊
- 15 東京大学総合図書館藏 多紀元堅旧藏本 天保十年 二十卷二十冊
- 16 野中烏犀園藏 天保十一年 浅田宗伯写 二十卷二十冊
- 17 刈谷図書館藏 天保二十一年 村上承卿写 二十卷二十冊
- 18 三宅家藏 江戸末期 十九卷二十四冊
- 19 杏雨書屋藏 嘉永二年 野上政純写 八卷八冊
- 20 杏雨書屋藏 嘉永四年 中村有嘉写 十六卷二十冊
- 21 杏雨書屋藏 白河文庫旧藏 江戸末期 十卷十冊
- 22 内閣文庫藏 浅草文庫旧藏 江戸末期 六卷六冊

- 23 杏雨書屋藏 昭和十四年 浜田繁次郎写 十九卷二十冊
- 24 北京大学図書館藏 李氏書目 日本丹波康頼撰 日本抄本（日本丹頼之冢原修節橋据舊抄本校有闕葉） 十九卷二十冊
- 25 中国医学科学院図書館藏 据寛政三年抄校本抄 二十卷二十冊
- 26 台湾国立中央図書館藏 日本東京康氏傳鈔古写本 二十卷二十冊
- C群 延慶本の系統
- 27 尊経閣文庫藏 宝永八年 卷第十五・十六 二冊
- 28 富士川文庫藏 文化元年 卷第八 一冊
- D群 金剛寺本
- 29 金剛寺藏 鎌倉前期 卷第十三 一冊
- E群 卷第二・四の系統
- 30 北里研究所東医研藏 室町期 卷第二・四 一軸
- 31 石原家藏 宝暦八年 紀宗直写 卷第二・四 一冊
- 32 杏雨書屋藏 博采堂写 卷第二・四
- F群 多紀家旧藏卷第二十二の系統
- 33 杏雨書屋藏 明和四年 片倉鶴陵写 卷第二十二 一冊
- 34 田中家藏 寛政九年 大戸孟写 卷第十二 一冊
- 35 杏雨書屋藏 江戸末期 小島学古写 卷第二十二 一冊
- 36 尚学堂藏 文政頃写 卷第二十二 一冊

37 桂仙堂文庫蔵 明治三十三年 佐伯理一郎校 卷第二十二 一冊  
G群 その他・零本

38 北京大学図書館蔵 李氏書目 三卷三冊

39 大塚修琴堂 卷第一・二・三 三冊

40 杏雨書屋蔵 江戸中期 伴直方写 卷第六・十七 二冊

41 杏雨書屋蔵 卷第一 一冊

42 杏雨書屋蔵 卷第一 一冊

43 尊経閣文庫蔵 卷第三 一冊

44 無窮会図書館蔵 卷第一 一冊

45 静嘉堂文庫蔵 卷第一・二 二冊

46 桂仙堂文庫蔵 文政頃写 卷第二 一冊

47 宮内庁書陵部蔵 卷第三 一冊

48 杏雨書屋蔵 卷第四 一冊

49 国会図書館蔵 卷第三十 一冊

H群 卷第一・諸葉和名第一の写本

50 国会図書館蔵 白井文庫 一冊

51 京都大学人文科学研究所蔵 文化四年 一冊

52 桂仙堂文庫蔵 文化七年 米関拙写 一冊

(一) 散佚した写本

- 1 永観二年十一月二十八日献上本
- 2 康頼自筆本 半井家本巻第二十八・治傷第廿の注記「康頼自筆本之傷字也」
- 3 宇治入道大相国本（宇治本）
- 4 医家本・医本（重忠本・重基本）
- 5 その他 略す

## 二 伝写の系統

現存写本、散佚写本を含めて、次の二系統に大別する。

- (一) 注記、案語、傍訓等の増補の多い写本。主として半井家本の系統（A群）。散佚本として康頼自筆本、医家本。
- (二) 増補の比較的少ない写本。主として仁和寺本の系統、B群よりH群までの写本。散佚本として宇治本。

## 三 『医心方』の伝来からみた日本医学史の時代区分

『医心方』が日本医学史に名を出すのは、概ね次の二回である。第一は平安時代医学の項であって、同時代を代表する医書として、比較的詳細に記述されている。第二は江戸時代末期の多紀氏一門による半井家本の影写と安政版刊行についてである。

しかし、『医心方』のもつ千年の歴史と、それに先行する東洋医学伝来の数百年間を加えると、殆んど日本医学史の全

過程を、『医心方』は生きぬいたことになる。そこで今回、観点を逆にして、『医心方』の伝来という視点から、日本医学史を眺めることとする。そのため次の四個の事実を柱として考える。

- 1 丹波康頼『医心方』撰進、九八四年
- 2 正親町帝より半井瑞策へ下賜、一五七三年前後
- 3 半井家本の影写と刊行、一八五四—一六〇年
- 4 半井家本の国買上げと撰進一千年記念、一九八二—一八四年

この四つの歴史的事実の前後の年代は政治的、文化的、また医学史の上からみても、一つの転換期に当たっている。換言すれば時代の底流が、『医心方』をしてこのような出来事に遭遇させたという方が、正しいかも知れない。

#### I 期 医心方前期（四一三—一九八三）

五世紀初頭に朝鮮半島から医術が伝来した。さらに遣隋唐使により直接的に中国医学を輸入してより、『医心方』が撰進されるまでのほぼ五七〇年間。

#### II 期 医心方活用期（九八四—一三〇二）

『医心方』撰進より、梶原性全による『頓医抄』の撰述された一四世紀初頭までの約三百年間。『医心方』はわが国で編された唯一の教本であり、これを簡略化した医書も数種、編纂されたし、また『医心方』の筆写も数多く行われた。『医心方』にもられた医方も、年月とともにわが国の医療に滲透していった。

#### III 期 医心方衰退期（一三〇三—一六〇二）

『頓医抄』、『萬安方』の撰述から、安土・桃山の末期に至る約三百年間は、『医心方』の活用も次第に衰退していった。宋医学が輸入され、僧医の活躍が目立つようになるとともに、『医心方』の比重は下っていった。さらに明代となり『福

田方』が著わされ、李朱医学が導入されて、曲直瀬道三によって、『啓迪集』が刊行（天正二年・一五七四）されたのと、ほぼ時を同じくして、『医心方』御本は正親町帝から半井瑞策に下賜された。この前後より、キリスト教とともに南蛮医学が入ってきた。

#### Ⅳ期 医心方復刻期（一六〇三—一八六〇）

江戸時代のほぼ全期間がこれにあたる。室町末期より西洋医学のはしりとして、南蛮医学が入ってきたが、鎖国の実施とともに、和蘭医学として輸入された。これは従来の伝統医学とは全く異質の医学といえる。やがて蘭学として各方面に影響を与えた。それより以前、後世派に対抗して古方派という一派がおきたが、これは親試実験を主眼とするあまり、古典の考証を疎にする傾向もあつた。丹波氏の一族である多紀氏は、江戸医学館を督して、子弟を教育し、東洋医学の優位を守るために古典の復刻を宿願とし、遂に半井家本を影写して刊行（安政版）することができた。しかし開国とともに蘭方禁令も解かれ、英米系医学が流入してきた。

#### Ⅴ期 医心方廃用期（一八六一—一九六四）

明治維新前夜より、昭和四十年頃までの西洋医学万能期をさす。安政版刊行後、わずか八年にして幕府は倒れ、明治を迎えると医学館は廃止され、多紀氏も解職された。西洋医学採用の方針のもとに、ドイツ医学が主流となり、医制・医学教育もドイツをモデルとして制定された。『医心方』を顧みる人もなく、漢方医学は法制的には全く廃止にひとしくなつた。『医心方』を復刊しても、巻二十八は猥褻本として発刊停止処分をうけるという有様であつた。第二次大戦後は、アメリカ医学を全面的に受容し、高度の医療技術・薬品等も流入してきた。

#### Ⅵ期 医心方の再認識期（一九六五—）

先端科学をとり入れた医学・医療は、すべての人類の疾病をやがて排除するであろうと期待された。科学の進歩はすなわち、人類の幸福に連なると信じられてきたが、一九六五年前後を境にして、科学万能の弊害が指摘されてきた。それは

医学の領域にも及んできた。科学万能・人間性疎外を改めて、医の倫理が叫ばれるようになった。

折しも中国医学の全人的・総合的見地に立つ疾病観を見なおす動きがでてきた。その結果、東洋医学の再認識が行われるようになった。昭和五三年、厚生省も漢方薬の保険適用を認め、漢方ブームともいえる現象がおきてきた。この中において、『医心方』も各分野で研究対象となった。あたかも一九八四年（昭和五九年）は、医心方撰進一千年に相当するので、記念事業を行ったが、それに符合するかのように、半井家本は、半井家の所蔵からはなれて、国の所有に帰した。

#### 四　む　す　び

(一) 『医心方』の撰述に際しての特徴的なことは、編者丹波康頼は、中国医書の思想的・論理的事項はさけて、実用的なものを主に引用した。また繁雑なものは省略して、簡略化してとり入れた。このような受容姿勢は、日本が外来文化、学問を摂取する際の初期段階における一般的類型であり、『医心方』はその先例をなすものである。

(二) 伝写の系統、現存する写本は、増補、注記の多寡により、半井家本系と仁和寺本系とに二大別することができる。前者は御本に医家本を加えた系統であり、後者は宇治本の系統であると私は考えている。

(三) 本稿では触れなかったが、『医心方』にみる処置法、医学思想の祖型を、馬王堆漢墓出土医書の中に見ることができ。さらに撰進以来一千年の間に、『医心方』は日本医学の転換期になると、何らかの意味でその名を出してきた。今後もそうであろうと思う。この事は『医心方』が、日本医学の最古の源流の一つをなしているからであると考えている。

(京都医学史研究所)